

松 山 大 学 論 集  
第 24 卷 第 1 号 抜 刷  
2 0 1 2 年 4 月 発 行

## 愛媛県内大学生の異性に対する意識調査

—— 愛情・好意に対する性差の研究 ——

熊 谷 太 郎  
大 原 志 織

# 愛媛県内大学生の異性に対する意識調査

—— 愛情・好意に対する性差の研究 ——

熊 谷 太 郎<sup>†</sup>  
大 原 志 織<sup>‡</sup>

## 1. は じ め に

日本では少子化により社会保障の問題が顕在化している。特に、野田内閣が発足して以来、『社会保障と税の一体改革』と称して、消費税の増税や年金の問題がクローズアップされている。社会保障が問題となっているのは、日本の人口分布に変化が生じてきているからである、すなわち少子高齢化が進み、現行の制度を保つことが困難になってきたためである<sup>1)</sup>。そのため、社会保障の観点から、少子化対策は非常に重要な経済政策であり、早急に対策を講じる必要がある。

第2次ベビーブーム以降出生率が低下してきており、回復する傾向は現在のところ見られない。少子化の主要因として経済的な要因や晩婚化・非婚化が挙げられる。1990年前半にバブル経済が崩壊して以来、『失われた20年』と言われるほど日本は長きにわたる経済の低迷に苦しんでいる。特に、賃金構造基本統計調査によると平均賃金は2002年の494万6,300円から2010年の466

---

<sup>†</sup> 松山大学経済学部准教授

<sup>‡</sup> タカヤ商事株式会社

1) 日本では、年金制度について、現役世代が高齢者世代を支える賦課方式を採用している。そのため、高齢者が増加し現役世代が減少すると、日本の基礎年金制度は崩壊すると言われている。賦課方式を採用しているため、年金受給者数と被保険者数の比率を表す従属比率の改善、すなわち少子化対策をしない限り、根本的な問題を解決することはできない。詳細は小塩（2005）を参照。

万7,200円と約28万程度減少している。AIU保険会社『現代子育て経済考』2005年度版によると、出産から22年間の子育てにかかる基本的養育費は1,640万円で、幼稚園から大学まですべて公立・国立の場合でも教育費は1,345万円必要となり、子育てに合計2,985万円必要となる<sup>2)</sup>。したがって、平均賃金の停滞により子を産み育てたくても叶わず、少子化が進行している可能性がある。また、この事実は晩婚化・非婚男女の増加要因になっているかもしれない。

晩婚化・非婚化が進み、出産適齢期を逃し、その結果第1子のみ出産、もしくは子どもがいない家庭が増えている可能性がある。県内でも未婚率は年々増加している（表1、表2）。晩婚化については女性の大学進学率が増加し、その結果女性の社会進出が増えたことが影響している可能性がある。さらに、結婚の必要がないと思っていたり、仕事に打ち込みたいと思ったりするなどの理由で、結婚を遅らせる女性も目立っている。

表1：愛媛県内男性の未婚率

	25～29歳	30～34歳	35～39歳		25～29歳	30～34歳	35～39歳
1970年	17.7	6.6	5.2	1990年	38.1	13.1	7.6
1975年	20.9	9.7	5.1	1995年	46.3	19.1	9.8
1980年	23.0	9.3	5.7	2000年	51.0	25.6	14.0
1985年	29.1	10.3	7.0	2005年	55.0	30.2	18.7

表2：愛媛県内女性の未婚率

	25～29歳	30～34歳	35～39歳		25～29歳	30～34歳	35～39歳
1970年	37.8	8.2	3.7	1990年	58.4	27.5	16.4
1975年	41.5	10.1	5.0	1995年	61.2	32.9	19.6
1980年	50.0	17.0	5.8	2000年	63.5	38.0	23.4
1985年	54.9	23.6	11.6	2005年	65.1	42.2	28.5

2) 養育費の計算には、出産費用、食費、医療費や仕送り代金も含まれている。

望月（1975）は恋愛と結婚の一致の程度を調査している。この調査の中で、一致すべき、もしくは一致することが望ましいと考えている男性は合計で36.8%、女性は40.0%だった。同じ項目を鈴木・山浦（1994）で尋ねているが、男性は41.5%、女性については65.2%に上昇している。これは、交際相手と結婚相手が同じ事を望む比率が増えていることを意味している。しかし、第14回出生動向基本調査によると、結婚しない理由として「適当な相手がいない」の比率が高まっており、そもそも魅力的な交際相手がいないことを示唆している<sup>3)</sup>。また、株式会社オーネットが2012年の新成人に恋愛や結婚についてどのように考えているかを調査している<sup>4)</sup>。この調査の中で、交際相手がいない新成人の男性は79.0%、女性は71.5%にのぼる。その内、交際相手が欲しいと思っている男性は70.6%、女性は65.7%にのぼる。この調査結果は、交際相手が欲しいにもかかわらず相手がいないことを示唆している。恋愛についての意見の中で、『交際相手を作るには積極的な活動が必要だ』については、男性の72.8%、女性の65.0%はそうように考えている。また、『交際相手に束縛されたくない』については、男性の66.8%、女性の72.8%がそうように考えている。さらに、『恋愛は重要である』と考えている男性は74.2%、女性は71.5%になる。したがって、恋愛はしたいものの、何らかの理由で踏み出せず、また男女で恋愛に対する姿勢に若干の差異があることが予想される。

そこで、未婚率上昇の根本原因と考えられる上記の問題をより明確にするために、愛媛県内に通う大学生を対象に異性の友人や交際相手に対して、愛情や好意という感情にどのような差があるのかを調査し、男女の意識の差を分析する。使用するアンケート項目は、Rubin（1970）によって開発された愛情（love）

---

3) 18歳～24歳の男性で31.0%、女性は35.0%、25歳～34歳の男性で46.2%、女性は51.2%にものぼる。

4) オーネットは楽天グループの結婚情報サービス会社であり、2012年の調査で17回目となる。調査地域は全国で、1991年4月2日から1992年4月1日生まれの未婚男性・未婚女性を調査対象としている。調査方法は楽天リサーチ株式会社モニターによるインターネットを利用したクローズ調査で、サンプル数は男性400人、女性400人の計800人である。

尺度を邦訳した藤原・黒川・秋月（1983）を採用する。本稿では、性差だけではなく、現在交際相手がいるかいないかに区別し友人に対する愛情尺度や交際相手に対する愛情尺度の差、交際期間の長さや愛情尺度の関係を分析する。さらに、愛情尺度についての因子分析を行い、2次元の構造にわかれるか否かを分析し、それぞれの因子の関係や交際期間との関係について分析する。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では記述統計や調査紙を紹介し、第3節では対友人・対交際相手の愛情尺度や交際期間との創刊関係について、性別や交際相手がいる・いないといった属性別に分析する。第4節では、対友人・対交際相手の愛情尺度を因子分析し、それぞれの関係を分析する。そして、第5節でまとめと今後の課題を検討する。

## 2. 調査概要

### 2.1 質問紙

質問紙は三部構成である。質問内容は Rubin（1970）によって開発された愛情尺度を邦訳した藤原・黒川・秋月（1983）を採用しており、各質問項目に対して「1＝まったくそう思わない」～「5＝非常にそう思う」の5件法で尋ねている。また、質問項目の\*\*については、A）は親しい友人、B）は現在交際している（交際していない場合は、好意を持っている）異性を思い浮かべて回答してもらった。

A）異性の友人について（対友人愛情尺度：以下、L－F尺度と表現する）

1. もし\*\*さんが元気がなさそうだったら私は真っ先に励ましてあげたい。
2. すべての事柄について、私は\*\*さんを信頼出来るという気がする。
3. \*\*さんに欠点があってもそれを気にしないでいられる。
4. \*\*さんのためなら、ほとんど何でもしてあげるつもりだ。
5. \*\*さんをひとり占めしたいと思う。
6. \*\*さんと一緒にいられなければ、私はひどく寂しくなる。

7. 私は一人でいると、いつも\*\*さんに会いたいと思う。
  8. \*\*さんが幸せになるのが私の最大の関心である。
  9. \*\*さんのことならどんなことでも許せる。
  10. 私は\*\*さんを幸せにすることに責任を感じている。
  11. \*\*さんと一緒にいると、相手の顔を見つめていることが多い。
  12. \*\*さんから信頼されると、とてもうれしく思う。
  13. \*\*さんなしに過ごすことは、つらいことだ。
- B) 恋人、または好意をもつ異性について（対交際相手愛情尺度：以下、L－P尺度と表現する）：『各項目はA）と同じなので省略する。』
- C) フェイス項目

「性別」,「血液型」,「学年」,「交際相手の有無」,「交際期間」,「男女の友情が成立するか否か」をそれぞれ回答してもらった。

## 2.2 記述統計量

記述統計量については、表3にまとめられている<sup>5)</sup>表3から明らかなように、男女比はほぼ均等になっている。大学については松山大学の学生が約7割を占めている。交際相手がいる割合は全体の42.2%で、第17回新成人意識調査(2012)と比較すると、交際相手がいる割合が高いことが特徴的である<sup>6)</sup>。学年についてはバランスが取れており、学年による意見の偏りは生じないと予想される。最後に、男女の友情は成立するかの間について成立すると回答しているのは全体で83.8%とかなり高い割合の学生が男女の友情は成立すると考えていることが窺える<sup>7)</sup>。

---

5) 無回答があるため、必ずしも総数は一致しない。

6) 第17回新成人意識調査(2012)によると、交際相手がいる割合は24.47%となっている。

7) 性別では、男性の39.6%、女性の49.4%が交際相手がいると回答しており、女性のほうが交際比率は高かった。しかし、男女の友情は成立するかの間に対しては男女ともに8割を超える学生が成立すると回答しており、大きな性差は観察されなかった。

表3：記述統計量

性別	男性	90	学年	1 回生	22
	女性	83		2 回生	32
大学	松山大学	120		3 回生	64
	愛媛大学	53		4 回生	55
交際相手	いる	73	血液型	A 型	63
	いない	100		B 型	37
男女の友情	成立する	145		O 型	49
	成立しない	28		AB 型	22

### 3. 愛情尺度と期間の相関関係

#### 3.1 各尺度間の性別相関係数

各尺度間の関係について検討する。表4は男性と女性の各尺度の相関係数を表している。明らかに性差があることがわかる。男性のL－F尺度とL－P尺度の相関係数は低い。これは、男性はL－F尺度が高くてもL－P尺度が高いとは限らない事を意味する。一方、女性のL－F尺度とL－P尺度の相関係数は高く、男性と異なり交際相手と友人に対する愛情は男性ほど差が無いことを意味する。

L－F尺度と交際期間、L－P尺度と交際期間についても男女で差がある。男性についてはL－F尺度と交際期間の相関係数は負である。一方、女性については正である。男性は交際期間が長いほど、対友人愛情尺度が低くなる。女

表4：尺度間における相関係数

男性	a	b	c	女性	a	b	c
a L－F尺度				a			
b L－P尺度	.251**			b	.517***		
c 交際期間	-.233**	-.051		c	.092*	.505***	

\*\*\*： $p<.01$ , \*\*： $p<.05$ , \*： $p<.10$

性について、それほど変化は見られない。

L－P尺度と交際期間の関係について、性差はより顕著に現れている。男性はL－P尺度と交際期間に相関はないが、女性については交際期間が長いほどL－P尺度も高くなり、愛情がより深くなっていくことが分かる。

### 3.2 交際相手の有無別各尺度間の性別相関係数

3.1では、性別の分析を行ったが、交際相手の有無によって、これらの相関が変化する可能性がある。例えば、交際相手がいない方が、好意を持っている相手に対しておおらかになり、各尺度が高くなる可能性がある。そこで、3.2では、交際相手の有無別の性別分析を試みる。

表5は交際相手がいる男女の各尺度の相関係数を表している。交際相手がいる男性については、各尺度間の相関があるとは言えない。女性についてはL－F尺度が高ければL－P尺度も高く、交際期間が長ければL－P尺度も高くなっており、交際期間が長いほど女性は交際相手に対する愛情が深まっていくことを意味する。

表6は交際相手がいない男女別の各尺度の相関係数を表している。そのため、このケースではL－F尺度とL－P尺度のみの相関係数を導出している。男女ともに相関係数は1%有意で正であるが、女性のほうが強い相関があることが特徴である。

表5：交際相手がいる男女別の各尺度の相関係数

男性	a	b	c	女性	a	b	c
a L－F尺度				a			
b L－P尺度	.195			b	.570***		
c 交際期間	-.097	-.293		c	.126	.391**	

\*\*\*： $p < .01$ ，\*\*： $p < .05$



表6：交際相手がいない男女別の各尺度の相関係数

男性	a	b	女性	a	b
a L-F尺度			a		
b L-P尺度	.388***		b	.641***	

\*\*\*：p&lt;.01

### 3.3 考察

ここまでの分析で、各尺度の相関は男性よりも女性、また交際相手がいる男女よりも交際相手がいない男女の方が高いことがわかった。交際相手がいると異性の友人と一定の距離を取るためであると推測される。また、女性については交際相手がいても、交際相手への愛情尺度が高ければ、異性の友人についても同様に愛情尺度が高いことがわかる。女性は男性ほど友人と交際相手を区別しないのかもしれない。

各尺度の大きさについてはどうだろうか。各尺度の平均値と標準偏差については表7で示されている。男性については、交際相手がいないほうがL-F尺度は有意に高い。(t=-2.525 (n=90), p<.05)。一方、交際相手のいる女性の方が交際相手のいない方よりもL-P尺度が有意に高かった (t=5.917 (n=83), p<.01)。

男性は好意を持っている女性については、交際関係に依存せず愛情尺度が高いが、友人については交際相手がいない方が愛情尺度の平均は高い。一方、女

表7：各尺度の平均値と標準偏差

	交際相手あり		交際相手なし	
男性	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
L-F尺度	30.56	7.13	34.26	6.35
L-P尺度	45.66	9.14	43.70	6.49
女性	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
L-F尺度	31.00	6.97	30.54	6.70
L-P尺度	48.15	6.80	39.00	7.27

性については、友人への愛情尺度は交際関係の有無による差はないが、実際に交際関係のある女性の方が交際関係のない女性よりもL－P尺度は有意に高い。男性については、交際相手がいることにより異性の友人の愛情尺度を低めるが、女性は交際相手の愛情尺度を高める。このことから、男性は異性の友人への愛情を低くすることにより相対的に交際相手への愛情を高めているが、女性は交際相手への愛情を高めることにより、相対的に異性の友人との差を大きくしている。したがって、交際相手ができることによって男性の方が女性よりも、異性の友人との付き合いが減少すると予測される、すなわち、男性の方が交際相手のみの付き合いを大切にすることもかもしれない。

## 4. 因子分析

ここまでは、性別や交際相手の有無別に各尺度間でどのような関係があるかを分析してきた。以下では、各尺度はどのような構造を持ち、それが属性別にどのような関係があるのかに焦点を当てて分析をする。

### 4.1 L－F尺度の因子分析

L－F尺度について因子分析を行った。図1のように、2因子で固有値が小さくなり安定することから、L－F尺度について二因子構造を持つと考えられる(表8)<sup>8)</sup>。第一因子には、A7「私は一人でいると、いつも\*\*さんに会いたいと思う。」やA13「\*\*さんなしに過ごすことはつらいことだ。」等、独占欲や悲哀といった激しい感情を伴う項目が属している。本稿では、L－F尺度の第一因子をマニアAとする。第二因子には、A4「\*\*さんのためなら、ほとんど何でもしてあげるつもりだ。」や、A1「もし\*\*さんが元気がなさそうだったら、私は真っ先に励ましてあげたい。」等、利他的愛の感情を伴う項目が属しているため、本稿ではアガペーAとする。さらに各因子は、正の相関を持つ。

---

8) 表は因子負荷量が.400を下回るA3「\*\*さんに欠点があってもそれを気にしないでいられる。」とA12「\*\*さんから信頼されると、とてもうれしく思う。」を除外している。

図1：L-F尺度のスクリープロット

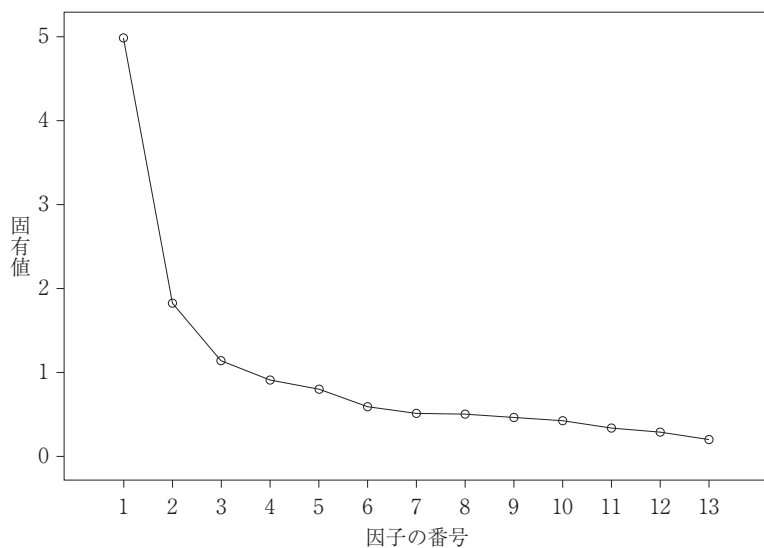


表8：L-F尺度の因子分析結果

項 目	因 子	
	1	2
A 7	.954	-.095
A 6	.715	-.008
A10	.712	.047
A13	.652	-.168
A 5	.643	.158
A11	.561	.045
A 4	-.021	.849
A 2	-.124	.733
A 1	-.076	.684
A 9	.203	.456
A 8	.372	.411

#### 4.2 L-P 尺度の因子分析

次にL-P尺度について因子分析を行った。L-P尺度についても、図2にあるように二因子で固有値が小さくなり安定することから2因子構造を持つと考えられる(表9)。第一因子には、B5「\*\*さんをひとり占めしたいと思う」や、B6「\*\*さんと一緒にいられなければ、私はひどく寂しくなる。」等L-F尺度でも第一因子に含まれた項目が数多く属しているの、L-P尺度における第一因子をマニアBとする。B1「もし\*\*さんが元気がなさそうだったら、私は真っ先に励ましてあげたい。」やB8「\*\*さんが幸せになるのが私の最大の関心である。」といった、L-P尺度では第二因子に含まれた項目もL-P尺度では、第一因子に属している。B1が第一因子に属した理由として、励ますだけでなくアドバイスや改善策を共に模索し一緒に解決したいといった感情を交際相手に持つのではないかと考えられる。また、B8が第一因子に属した理由として、幸せにしてあげたいという強い意志が交際相手

図2：L-P尺度のスクリープロット

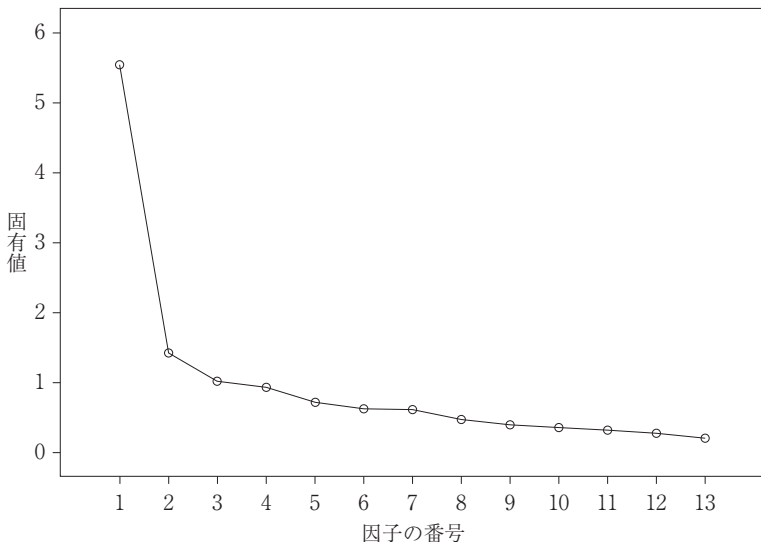


表9：L－P尺度の因子分析結果

項 目	因 子	
	1	2
B 7	.928	-.189
B 6	.874	-.155
B13	.793	-.048
B11	.602	-.076
B 5	.565	.171
B 8	.522	.280
B 1	.444	.240
B10	.418	.271
B 9	-.074	.698
B 4	.190	.652
B 3	-.173	.632

には持たれることが挙げられる。第二因子は、B 3「\*\*さんに欠点があってもそれを気にしないでいられる。」やB 4「\*\*さんのためならほとんど何でもしてあげるつもりだ。」、B 9「\*\*さんのことならどんなことでも許せる。」の3項目が属した。これら3項目もL－F尺度同様に利他的愛の感情が見られるので、アガペーBとする。またL－P尺度においても、各因子は互いに正の相関を持つ。

### 4.3 各因子から見る男女の友情と愛情

表10にマニアA・B、アガペーA・Bの男女別の平均値と標準偏差をまとめている。性別で平均値に差があるかどうかを調べると、マニアA ( $t=2.14$  ( $n=174$ ),  $p<.05$ ) とアガペーA ( $t=2.28$  ( $n=174$ ),  $p<.05$ ) については有意な差があることがわかった。したがって、男性のほうが女性よりも異性の友人に対して、独占欲・悲哀、利他的愛をもって接しているといえる。また、アガペーB ( $t=2.77$  ( $n=175$ ),  $p<.05$ ) も男女で有意な差があったが、マニアB

については有意な差はなかった。このことから、男女ともに交際相手に対しては独占欲を同程度に持っているが、利他的愛については、男性の方が平均的に高いことがわかる。

ただし、いくつかの点に気を付けなければならない。マニア A については男性の方が女性よりも標準偏差が大きい。反対にマニア B については女性の方が男性よりも標準偏差が大きくなっている。そのため、独占欲・悲哀について、対異性の友人について、男性は様々な考えを持っているが、対異性の交際相手について、女性の方が様々な考えを持っているといえる。アガペーについて、A は女性の方が男性よりもばらつきが大きい、B は男性の方が女性よりもばらつきが大きい。このことから、利他的愛については、対異性の友人に関しては女性が、対異性の交際相手については男性が様々な考えを持っているといえ、男女の差が現れていると言えよう。

表 10：男女別マニア、アガペーの平均値と標準偏差

項 目	男 性		女 性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
マニア A **	1.9409	.68747	1.7329	.59008
マニア B	3.3723	.68688	3.3441	.74074
アガペー A **	2.8239	.65823	2.5905	.69968
アガペー B **	3.3116	.75884	3.0039	.71361

\*\*：p<.05

表 11 は各因子間の相関係数を表している。全体的な傾向として、各因子間で正の相関が見られる。男女別に見ると、全体的に男性よりも女性の方が相関係数が高い。また、マニア A とアガペー B、マニア B とアガペー A の相関係数が特徴的である。これらの相関関係は、いずれも女性のみに有意である。これらのことから、男性は異性の友人と交際相手を区別して付き合う傾向にある一方、女性は友人や交際相手に関係なく同じような好意の持ち方をする傾向にあ

表 11：各因子の相関関係

	全 体	男	女
マニア A－アガペー A	.499***	.469***	.518***
アガペー B－マニア B	.472***	.438***	.568***
マニア A－マニア B	.348***	.259**	.442***
アガペー A－アガペー B	.382***	.288***	.445***
マニア A－アガペー B	.147	-.050	.352***
マニア B－アガペー A	.229***	.116	.330***

\*\*\* :  $p < .01$ , \*\* :  $p < .05$

と言えよう。この結果は『異性の友人』と『同性の友人』は性の違いがあっても友人であるので、この両者に対する感情は女子において類似しているのである。」とした豊田・藤田（2001）と一致する。

ここまでは、男女別に分析したが、独占欲・悲哀や利他的愛については交際相手の有無が関係するかもしれない。交際相手の有無別にまとめたものが表 12 である。男性では、マニア A ( $t = -2.72$  (88),  $p < .01$ ), アガペー A ( $t = -1.95$  (87),  $p < .01$ ) で有意な差があった。交際相手がいないことによって、女性の友達に対する好意が、交際相手がいる男性に比べて高くなっていると考えられる。一方、女性ではマニア B ( $t = 5.66$  (81),  $p < .01$ ), アガペー B ( $t = 2.30$  (81),  $p < .05$ ) で有意な差があった。女性については、交際相手の有無にかかわらず、男性の友人に対して同じような好意をもつ一方で、交際相手がいる場合、いないときに比べると交際相手に対して好意に対する得点が高くなる傾向にある。

次に、各尺度の相関関係を見る。男女ともに恋人の有無に関わらず、マニア A とアガペー A には正の相関関係があることがわかった。また、交際相手がいる場合、異性との交際期間とはどちらの項目も相関があるとは言えないことがわかった。

一方、交際相手がいる男女に関するマニア B と交際期間については顕著な差

表 12：恋人の有無別 L－F 尺度と L－P 尺度の各因子の平均値と標準偏差

性 別	恋 人	人 数	平 均 値	標 準 偏 差
男 マニア A***	いる	32	1.6875	.68657
	いない	58	2.0776	.62690
マニア B	いる	32	3.4492	.77437
	いない	57	3.3026	.61779
アガペー A***	いる	32	2.6687	.76303
	いない	57	2.9439	.56030
アガペー B	いる	32	3.4271	.90887
	いない	56	3.2262	.66699
女 マニア A	いる	40	1.7417	.52833
	いない	41	1.7602	.64339
マニア B***	いる	41	3.7500	.55551
	いない	42	2.9673	.69408
アガペー A	いる	40	2.6350	.74543
	いない	42	2.5857	.64224
アガペー B**	いる	41	3.1870	.72667
	いない	42	2.8413	.64282

\*\*\*：p&lt;.01, \*\*：p&lt;.05

表 13：交際相手がいる男女の各尺度の相関係数

男性	a	b	c	女性	a	b	c
a マニア A				a			
b アガペー A	.444**			b	.612***		
c 交際期間	-.108	-.009		c	.094	.142	

\*\*\*：p&lt;.01, \*\*：p&lt;.05

表 14：交際相手がいない男女の各尺度の相関係数

男性	a	b	女性	a	b
a マニア A			a		
b アガペー A	.444**		b	.425**	

\*\*：p&lt;.05



が見られる。男性は交際期間が長いほど独占欲・悲哀が強まるとは言えないが、女性は交際期間が長いほど独占欲・悲哀が強まる。すなわち、女性は恋人との交際期間が長期化すると、恋人に対する愛情尺度の総得点が上昇し、時間をかけて恋人に対する愛情を深める傾向にあるといえる。この結果は、「女性においては、交際相手のことを考えて激しい感情を抱き、相手のために尽くす意識も恋愛行動の進展につれて高まっている。」とした松井（1993）や、「男性は恋愛関係の初期に熱愛感情が高まるのに比べて、女性は関係の完成期に感情が高まっていた。」とする松井（1990）の結果と一致する。松井（1990）では、女性の感情が恋愛の完成期に高まる理由として、恋愛関係に対する重要性の評価の性差を取り上げている。女性にとって結婚は、その後の人生を左右するものであるため恋愛の進展に慎重になりやすいという解釈である。望月（1975）の調査でも、恋愛や結婚に対して女性の方が男性に比べて現実的に考えていることが明らかになっている。また、天谷（2005）では、恋愛相手に対する独占欲の強い女性は、結婚相手に尽くす傾向があると述べ、夫婦関係における伝統的な性役割という考えを現代女性が保持していることを指摘している。今回の結果からも、女性にとって結婚や結婚相手の選択は重要であり、結婚相手となり

表 15：交際相手がいる男女の各尺度の相関係数

男性	a	b	c	女性	a	b	c
a マニア B				b			
b アガペー B	.574***			c	.599***		
c 交際期間	-.247	-.319		d	.442***	.239	

\*\*\*： $p < .01$

表 16：交際相手がいない男女の各尺度の相関係数

男性	a	b	女性	a	b
a マニア B			a		
b アガペー B	.331**		b	.453***	

\*\*\*： $p < .01$ , \*\*： $p < .05$

うる交際相手に対する思いは時を経ても変化していないことが分かる。

## 5. お わ り に

本稿では、愛媛県内大学生の異性に対する意識調査をし、分析を行った。その結果、いくつかの特徴が明らかとなった。L－F尺度と交際期間の関係について、男性は負の相関を持つものに対して、女性は相関がなかった。また、L－P尺度については、男性は相関があるとは言えなかったが、女性は正の相関を持つことがわかった。交際期間が長くなるほど、女性は交際相手に対する愛情得点を上げていくことを意味する。交際相手の有無別に見ると、交際相手がいる男女で差が明らかとなった。交際相手のいる男性については各尺度間、各尺度と交際期間について、相関があるとは言えなかった。一方、女性については交際期間が長いほどL－P尺度は高くなり、またL－F尺度とL－P尺度について、正の相関が得られた。女性は異性に対して徐々にその愛情を深め、また交際相手と友人をそれほど区別なく好意を持つといえる。

本稿では、L－F尺度とL－P尺度の因子分析も行った。その結果、各尺度をマニアとアガペーの2因子に分類することができた。その結果、女性は異性の友人と交際相手に対して、男性ほど区別しないことが明らかとなった。今回のアンケートでは、大半の学生が男女の友情は成立すると回答したが、男性については成立しない可能性が高い。

本来ならば、愛情尺度だけではなく、好意尺度も調査対象にすることによって、真の意味で男女の友情が成立するかを測ることができたかもしれない。しかし、今回の調査では好意尺度は調査していない。好意尺度を同時に測り、男女の友情が成立するのか、男女で愛情と好意に差はあるのかを分析することが今後の課題である。また、晩婚化・少子化対策といった政策を視野に入れると、こういった男女の感情が結婚とどのような関係があるのかを分析することも今後の重要な課題である。

## 参 考 文 献

- 天谷祐子（2005）“恋人と結婚相手に対して求めるものの違い—性差と恋人の捉え方・恋愛経験の有無から—”，名古屋大学教育発達科学研究科紀要，心理発達科学，52，9-19.
- 小塩隆士（2005）『社会保障の経済学』，日本評論社.
- 鈴木康平・山浦一保（1995）“現代青年の交友・恋愛・結婚に関する意識調査，”熊本大学教育研究実践，12，7-20.
- 豊田弘司・藤田正（2001）“大学生の愛情と好意における性差，”奈良教育大学教育研究所紀要，37，31-35.
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士（1983）“日本版 Loving-Liking 尺度の検討，”広島大学総合科学部紀要Ⅲ，7，39-46.
- 松井豊（1990）“青年の恋愛行動の構造，”心理学評論，33，355-370.
- 松井豊（1993）“恋愛行動の段階と恋愛意識，”The Japanese Journal of Psychology，64，335-342.
- 望月嵩（1975）“青年期の男女交際と結婚観，”大正大学研究紀，61，445-457.
- Rubin, Z（1970）“Measurement of Romantic Love,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.